プログラム

12時00分〜13時00分

こども食堂応援ライブ＆ダンス

❶「こども食堂支援ソング」お披露目ライブ

キリハレバレさん

全国のこども食堂の活動を支援するために、こども食堂のテーマソングを制作したミュージシャンのキリハレバレさん。できあがったばかりのこども食堂支援ソングを含め、3曲を披露します。

❷みんなでおどろう!!「地球子供食堂」でダンス

Castle in the Air（谷川公子さんと渡辺香津美さんのユニット）

映画「こどもしょくどう」サントラCD収録曲に、デリシャスダンスユニット「earth child」がつながりんがりんぐ・ダンスとPVを披露します。振付を担当したREI・KOさんによるダンスレクチャーも。

第1部

14時00分〜15時00分

講演「地域で育つ子どもたち〜みんなが集うこども食堂〜」

尾木直樹さん（尾木ママ）

1947年滋賀県生まれ。教育評論家。中学、高校の国語教師を22年間務めた後、法政大学教授など22年間大学教育に携わる。臨床教育研究所「虹」所長として、教育・子育てに関する調査・研究、評論活動を続ける。「取り残される日本の教育〜わが子のために親が知っておくべきこと〜」（講談社）など著書多数。

第2部

15時10分〜16時25分

リレートーク「こども食堂であったこと」

全国のこども食堂で実際にあったエピソードをリレートーク形式で発表します。
最後は、栗林知絵子さん（NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長）と湯浅誠さん（社会活動家、NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長、東京大学特任教授）の「振り返りトーク」で会を締めます。

16時25分〜16時30分

記念撮影・閉会

こども食堂サミット2019の記念撮影

16時30分〜17時30分

交流会

会場のいすを片付けて、参加者同士が自由に交流する時間です。

こども食堂サミット2020

〜こども食堂であったこと〜

日時●2020年2月2日（日）　12時〜17時30分（開場11時30分）
※12時〜13時　こども食堂応援ライブ＆ダンス
※16時30分〜17時30分　交流会（参加自由）

会場●豊島区役所内「としまセンタースクエア」
（南池袋2-45-1　豊島区役所本庁舎1階）

主催●こども食堂ネットワーク
特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

協賛●豊島区

こども食堂
エピソード集

こども食堂であったこと

こども食堂では、毎回、いろんなことが起きます。
うれしいこと、たのしいこと、困ったこと、かなしいこと……。
今回、こども食堂サミットに参加される方に、
こども食堂で実際にあったエピソードを募集しました。
掲載を許可してくださった67人の「こども食堂であったこと」を、ここに掲載します。

※掲載順は、申込み順になっています。 ※敬称は省略させていただきました。
※無断複写、転載などはご遠慮ください。

●こども食堂に支援学校の中学生の生徒さんとお母さんが来てくれました。小さなこども達と遊んでくれて、とても楽しかった、また来ますと話してくれました。

引きこもりがちなお子さんだそうですが、それからは何回も遊びに来てくれるようになりました。

綿抜泰子（坂東市生活学校こども食堂）

●困窮・家庭環境などで本当にこども食堂を必要としている人と、普通（？）のひととの区別（区分？）がつかず、となることがある。どちらもこども食堂にとっては大事な人たちであることは承知してはいるが…

柳瀬正勝（なまむぎこども食堂）

●親の離婚で、月1回の面談に映画館やショッピングセンターなどを利用していたが、今ではこども食堂になり、地域の方と交流するなどして親子でゆっくり楽しそうに過ごしてあります。

・毎月1回のこども食堂を楽しみにしているおばあちゃんが、毎回お礼に詩を書いて持って来てくださっている。

・地域にある企業の独身寮で子ども食堂を開催しているが、転勤族だった寮の社員さんが、ご近所のボランティアさんや子どもたちと顔を合わせ、名前を覚え合い、声を掛け合うことができる場となり、若手の社員さんも毎回楽しみにしていているそうです。企業の独身寮の寮生と地域との交流が深まったと喜んでいます。

・学童保育に通っている児童が、こども食堂の日は学童を休んで参加している。

・ディサービスセンターの方が、おじいちゃんやおばあちゃんを連れてきてくださるので、世代を超えて過ごす場所になった。

・ネグレクトの子どもがこども食堂に来るようになり、今ではボランティアとして手伝いをしてくれている。帰りには食材を持たせるなど、見守りにもつながっている。

・毎回オープン前から来ているこどもの母親が、いつも子どもがお世話になっていますと手土産をもってあいさつに来てくださった。今では、仕事の休みを利用して調理のお手伝いに来てくれています。

・大学生のボランティアが、自分たちで企画をし、イベントをしてくれている。

・調理のお手伝いに来ている方が、地域や団体を越えて仲良くなり交流されている姿はうれしい。

大谷清美（NPO法人チャイルドケアセンター）

●企業CSRの方々が現場視察を（大人ひとり参加歓迎のこども食堂に対しても）過度に遠慮したり、逆に遠慮なく視察したがる方の中には無配慮すぎる質問（親はちゃんと食事くれる？など）をいきなりする人もいたので、最低限のレクは事前にした方が良いと思いました。

秋山宏次郎（こども食堂支援機構）

●今年度は、子ども食堂を持続可能な活動にするため、食でつながるフェスタ in福岡北九州大会、北九州子ども食堂学生サミットを開催し、子ども食堂のボランティアをしている方の目線で子ども食堂の現状と今後の方向性について考えていきました。

これらの大会運営は、今までの行政主導から民間と行政の実行委員会形式で初めて行い、さらに2月22日には第3回九州沖縄の子ども食堂をつなぐ研修会を行うなど、持続可能な子ども食堂の在り方について考えていくため、民間と行政が一体となって行ってきました。

今後、SDGs未来都市の本市の子ども食堂の支援体制をさらに強化するため、行政と中間支援組織と企業や大学とで子ども食堂の支援に特化した連携協定を結び、「人・もの・お金・場所」という子ども食堂を運営するうえで欠かせないものを「オール北九州」で支援していく体制づくりの構築も図っています。

来年度も子ども食堂の運営で必要に事は何かを常に考えながら、オール北九州で頑張っていきます。

長迫和宏（北九州市子ども家庭局子育て支援課）

●ボートレース若松や小倉競輪など公営ギャンブル場で常設の子ども食堂を開設しました。月1回ずつの開催ですが、競艇や競輪の選手も参加していただきながら、地元のNPOや地域の方に協力をしていただきながら実施しています。

実施に当たっては、北九州市の子ども家庭局や産業経済局、教育委員会などとも他の部署とも連携しており、公営競技を実施する当局としても地域の子どもたちの居場所づくりに微力ながら寄与しています。

末永圭（北九州市公営競技局地域貢献室）

●さのだい子ども食堂キリンの家を設立してから一年半。月に一回の開催ながら、参加する子供や地域の方々が毎回150～170名参加していただけ、どんどん増えている。

学校の先生に話を聞くと、小学校も中学校もキリンの家開催日は、キリンの家の話題ばっかりらしいです。

小学校、中学校の保護者がスタッフとして運営しており、仕事やで家事の両立は大変ですが、楽しみながらやってます。

特にうれしかったのが、スタッフをやっている仲間たちが「私たち大人の居場所にもなってるんだよ」と言ってくれたこと。地域活動から離れたがる子育て世代が多いと言われる中、地域と子供、そして子育て世代を繋げられていることがとっても嬉しいです。

水取博隆（さのだい子ども食堂キリンの家）

●〝ゲロを手のひらで受け止める。お漏らしをしたパンツを洗う〟

二年前のこと、子ども食堂に来て、体調が悪くなった小4の女子を車で送る際に、後部座席に一緒に座った私の隣で、車の中でも吐きそうになり、私が手のひらで受け止めました。その後、叱ることもせず、ケロッとしている私に驚いたようです。彼女との距離が近づきました。

また、今年の夏には、大きい方を漏らしてしまった四年の男子のパンツを庭の水道で手洗いしました。一緒にいた男子が「これで一生、石田さんに頭が上がらないね」と言ってました。ついつい、叱りすぎてしまう、親や学校の先生とは一線を画し、なるべく細かいことは言わないようにしています。それでも、あまりの悪さには叱りますけれども。

石田裕子（放課後キッチン・ごろごろ）

●凄く横柄なスタッフがいて、その人が嫌で何人もスタッフが辞めてしまった。

大森大（NPO法人imitata〈旧わくわく子ども食堂〉）

●私の活動をフェイスブックで紹介していたらどんどん人がつながり、30年前の小学校の恩師がわざわざ来場してくださいました。そして、先生は四国のひとり親の支援活動を教師仲間とされているそうで、子ども食堂という取り組みにも何かできることはないか考えるきっかけをもらったとても喜んで下さいました。

山田アキ菜（にこにこ食堂）

●予約制ではないので、人数の把握ができない中、中学生が白飯のお代わりを4回されて足りなくなってきたのでストップしたこと。

坂本久子（いわぬま・こども食堂プラス）

●こども食堂に必ず来る中学生が、学校給食のない週末や長期休み、満足な食事を摂れていないことが分かりました。親が他人を家庭に住み込ませる事態が起きることも度々あり、居場所がなくなった彼を支えるため、行政の子ども総合センターと連携しました。

緒方美穂子（あおとこども食堂、パルこども食堂、よみかき宿題こどもカフェ@なぎ）

●近くの青果市場の協力で選外品を活用して食品ロスを削減している。

渕上隆（足立区議会議員）

●①参加者を厳格に、要支援者に限定する事は、大変難しい事なのですが、時として単なお食事会と勘違いされて参加される（ママ友の会的な、）参加者が出てくる事。
②日時を重ねるにつれ、一部のボランティアの方の意識に変化が現れる事、（例：当初の気持ちから、徐々に変化がみられるようになる事等、、）

七田直樹（駒岡　丘の上こども食堂）

●こども食堂にお手伝いに来てくれる婦人さんで、なんと高校卒業以来50年ぶりに再会したという二人がいました。お二人とも感動して、お互い歳をとったわねと話していました。楽しそうに談笑する姿を見て、こういう機会を提供できたことにやり甲斐を感じています。

岡定紀（おのみなとこども食堂）

●（児童相談所介入家庭）現在は高校を卒業して県外の専門学校生ですが、中学2年の時に、中学校の担任から「給食以外食事をしていない、どうにかしてほしい」と直接私に連絡があり、それからずっと青空に参加していました。
今年の4月から県外で生活しておりますが、住んでいる所近くのこども食堂を探して、現在スタッフとして頑張っています！　それを聞いた時はうれしかったです！　また、この間も敦賀に帰ってきた、と開催日に突然来てくれました。大人も子ども達も大喜びでした。
結果がなかなか見えない取り組みなので、とても嬉しかったです。

中村幸恵（こども食堂　青空）

●『じい～んこども食堂』を始めてから半年になります。2か月ごとに開催しておりますが、珍しさもあり毎回たくさんの人が参加してくれます。手伝ってくれるスタッフの方や、企業、根室市役所、社協、根室警察署、JA根室、などたくさんの方々の協力で運営しております。

前回は『新・根室プロレス』のキャラクター、レスラーの方々のお手伝いや警察署の署員の方の楽器演奏等の企画があり、参加者に大好評でした。
食材の提供を申し出て下さる、個人や企業の力を頂きながら運営しております。地域がらたくさんの人が集まり、楽しむ場があまりないところなので、この場に来て一時でも楽しい時間を過ごす事が出来たら、良いなとの思いでやっています。
本来のこども食堂の目的とは、少し違うかもしれませんが、不特定多数の地域の人たちが集まって、楽しい時間を共有し段々と孤食の人にも広がっていったらいいなぁと思います。
スタッフの中には、色々な職種の方がおりますので、様々な困り事にも対応していきたいと思います。

成田文子（じぃ～んこども食堂）

●半年以上毎月1人で来てくれた小学4年生の男の子がいました。
その男の子が初めて来てくれた時「お母さんがここに来たら1人でご飯たべなくていいよって教えてくれたから」と話してくれて、毎回とても嬉しそうに来てくれていたのです。急に来なくなって、最初の月は「あれ？　まあ来られない月もあるだろう。もしかしたらお母さんといるのかな？」くらいにしか思ってなかったのですが、2ヶ月しても3ヶ月してもやってこない。ずっと気になって仕方がありませんでした。
半年近くたって偶然彼に出会えた時、やっと来られない意味がわかりました。
昭和町の隣町富田地区の彼は1人では小学校校区を超えてきてはいけなかったのです。自分の小学校校区から離れるときは必ず保護者と一緒でなければならない。その教えを彼は守ることにした結果、昭和地区での「こども食堂」には来ることができなくなりました。彼の家と私たちの食堂はたった数百メートルしか離れてないのです。富田地区は「こども食堂」がありません。ですから彼は土曜日1人で昼ご飯を食べるようになりました。
もう一つ、3・11の震災で千葉から徳島にお母さんと小学生、当時はまだ小学校入学もしていなかったでしょうか、移住してきた親子さんがいます。その子も保護者と一緒でないと昭和地区の「こども食堂」には来られない子です。お母さんが昼夜働いていて、たまたま私たちが行う「こども食堂」に目にちが会えば来てくれます。
小学生で不登校児の彼は大学生や私と遊ぶ時の笑顔はとてもかわいくて冗談もいうのですが「学校」という言葉にはお母さんの背中にそっと隠れるという反応を示します。お母さんの目もその時は意思のない無表情になります。
私はまず、お母さんを受入れたいと考え、「こども食堂」のボランティアにお誘いしたり、一緒

に勉強会に行ったり、私的に電話やラインを交わしお会いできるようになりました。まだ子どもさんのことは解決にはいたっておりません。お母さんの信頼を得て次に繋げていける段階になったばかりです。
また高校生のころからフードバンクやこども食堂のボランティアに参加していた生徒が将来の職業として「スクールソーシャルワーカー」を目指して大学で学んでいる最中の人もいます。

佐伯雅子（いきいき安心移動こども食堂）

●子ども達が毎回楽しみにして来てくれて「もっと開催して！」と言ってくれること
・「家では野菜を食べないのに子ども食堂では何でも美味しそうに食べる♪」と言ってもらえた
・「普段は大人しい子だけど、こども食堂ではイタズラしたり、子どもらしくやんちゃしてる♪」と言われ、子どもが子どもらしく過ごせる場所作りができてきてるなと感じた
・食事に来ていた小学生が中学生になり、遊んでもらう側から小さい子を遊んであげる側になったり、ボランティア参加してくれたり、子ども達の成長を実感
・子ども達が大学生や高校生や社会人ボランティアと接して、「あの学校に行きたい！」など、子どもたちの進学や将来の夢が膨らんでいっている
・小学生が子ども食堂を紹介するポスターを作ってくれたり、高校放送部の学生たちが子ども食堂を半年近く密着取材してくれて映像を作成してくれたり、作文に書いたり学校の全校集会で子ども食堂の取り組みを発表してくれたり、子どもたち発信で子ども食堂の輪が広がっていっている
・市の図書館内に子ども食堂紹介の特設展示を作っていただいて館内で子ども食堂を開催したり、小学校の先生や市役所の方が気になる子どもを子ども食堂に連れてきてくれたり、地域の認知や理解が広がり協力関係が築けてきました
・一般の方、農家さん、商店さん、企業さんなど支援の輪が広がってきています
・子ども食堂の参加者さんやボランティアさん、見学や勉強会に参加された方が自分たちで子ども食堂を始めて、市内で子ども食堂が9つに増えました。

近藤正明（太陽の家　桑名こども食堂〈NPO法人 太陽の家〉）

●朝日新聞の調査で、愛知県内には子ども食堂が10ヵ所しかないといわれた２０１６年春から、ゼミ生とともに、愛知県内の子ども食堂にボランティアとして参加し、①記録を作る、②愛知県子ども食堂マップを作る、③子ども食堂同士の横のつながり（あいち子ども食堂ネットワーク）を作るなどで、関わっています。

何よりも印象に残っているのは、子ども食堂に関わって、自らの進路を変えたり、自分を再発見したりする大学生を多く目にするようになったことです。子ども食堂に来て子どもが変わるというのは多くの子ども食堂の運営者らが証言することですが、子ども食堂に関わった大学生の彼・彼女らの人生が大きく変わるのを目撃することは、教員としては本望というか、教員冥利に尽きることです。

製造業が盛んな愛知県ではたくさんの就職先がありますが、子ども食堂に関わったのがご縁で、子ども食堂を運営する病院や生協、あるいは、市役所などに就職したり、大学院進学を検討したり、それぞれ様々ですが、子ども食堂体験が、ボランティアとして関わっている大学生にも大きな意味を持つということを実感しています。

今年もゼミ生・受講生の約30名以上が子ども食堂に定期的に関わっていますので、おそらくこれからもこういった体験は続くだろうと期待しています。

成元哲（あいち子ども食堂ネットワーク前事務局長）

●夜8時頃、小学校5年生の男の子と3年生の女の子、兄弟で昨日から家に食べ物がありません。何か食べるものはありますかと訪ねてきました。私たちの子ども食堂はすでに終了していましたが、急いで間に合わせの料理を作り食べれるだけ食べてもらいました。帰りはお菓子をお土産に持って帰ってもらいました。次の日から毎日子ども食堂へ来るようになりました。暗かった顔に笑顔が戻ってきました。よかったです。

細田光雄（子どもの広場in那覇）

●何も喋らず作って食べて帰っていた女の子が、ある時、「これのつくり方おしえてください」と。

三角美緒（西東京わいわいネット）

●医大の学生ボランティアリーダーから、3歳の子どもを連れてのボランティア希望があったのですが可能ですか？　との問い合わせがありました。何かあってのことかな？　と思い、個別に連絡をいただくことにしました。

連絡を取った所、こども食堂のボランティア募集を聞いて「子ども食堂」について興味があったので参加してみたいと思ったとのことでした。未婚で子どもを産み、将来を考えて看護学部を受験して学生をしている37歳の方でした。

それであれば参加者として参加していただき必要に応じてご自分のことを話していただくのも大きなボランティアの一つではないかと提案しました。同じような方が自分も学び直しをしようというきっかけに、学生さんにもこれからの多様な生き方への理解にもつながるのではとお話しました。自分の中で、なんとなく知られたくないという気持ちもありボランティアでということにしたかったのだと思います。でも、自分の生き方が他の方の力になればということであれば参加者として行きますということでお子さんと参加しています。

そのなかで女性支援団体からの支援金への応募も薦められエントリーしました。子育てと学業だけから社会との繋がりができたことはご本人にとっても心の余裕ができたように感じます。様々な方々の交流は数年後に助産師として働くときに活かされることと期待しております。

川守田栄美子（特定非営利活動法人インクルいわてインクルこども食堂）

●私がスイッチを入れ大きな炊飯器で炊いたご飯が、半分硬いままでの炊き上がりになってしまいました。大勢の子どもたちが楽しみに待っているのにどうしようと焦りましたが、他のスタッフの方が鍋で再度火を入れてくださり何とか食べられるご飯にしてくださいました。助かりました。

下出礼子（滝野川子ども食堂）

●母子家庭のおかあさんから、夕ご飯へのお誘いのお声がけをしたところ、「うちは子ども食堂は必要ないから」と言われました。気兼ねなく利用してもらうことのむずかしさを感じています。

家令牧（たんぽぽ子ども食堂）

●保護者から「子ども達がとても楽しみにしている」と言われたり、久しぶりに中学生が来所したりすると嬉しくなり、「居心地のよい場所になっているかな」と思う。一方で、困難を抱える子の原因が「保護者」である場合の無力さを感じている。養護教諭や行政の子ども家庭支援センター・社会福祉協議会などと連携しても、その困難を好転させることは難しく、「寄り添う」ことしかできないことがもどかしい。

我妻澄江（滝野川子ども食堂）

●1年前、子ども食堂に来てくれた母子（小学1年1人、未就学2人、妊娠中）が経済的に苦しくなったと、区役所の担当部署に相談があり、「食べ物でも文具でも何でもいいから欲しい」と言ってこられました。持ち家でありますが、外見からは想像できない生活の困難を抱える親子がいると実感します。食材や文具などを届けました。

岡村明（あったかキッチン水元）

●始めたばかりの頃、食べに来てくれる親子は会話も少なく、うつむき加減で食事をする人が多かった。回数を重ねると、友人（親子連れ）を誘って一緒に食事をするようになり、会話もふえ保護者（母親）の表情も明るくなり、こどもを叱る頻度も減少していった。家族だけで生活していると、子育て世代の母親にかかる精神的な負担も大きいと実感。月に1度でも生き抜きの場所になっていればいいのかなと感じつつ、活動を続ける活力にしています。

また、食事の際に麦茶を出していますが、最初はこどもがよくこぼしていたのですが、保護者の表情が明るくなると同時に、麦茶をこぼすことも減っていきました。ごはんを残さずに食べると、スタッフから褒められるのが嬉しいようで、こども食堂に来たときは、苦手な食材も完食。ご自宅でも、好き嫌いが減りつあるという話を聞くと、食育の一端を担えていると感じます。

佐藤由加里（かわさきこども食堂ネットワーク）

●小学校の3、4年生の時から学校でのいじめを受け続けていた男の子（現在高1）、コミュニケーションが苦手となり声かけしても小声でぶつぶつというばかりで気にかける存在の1人でした。２０１６年12月開設より子どもサロンへのお誘いをしても弟は参加していましたが、彼の参加はありませんでした。

地域行事に留学生が参加し、その際に彼が英語が好き、英語が得意という事を母親からの情報提供があり、留学生との交流を行った所、会話も弾む様になり、子どもサロンへ参加したりスタッフとして参加してくれる様になりました。

また、留学生との交流についての感想をローカル新聞社から求められた際にも快諾してくれて記事にされ掲載。母親には自分の殻に閉じこもっている様に見えていたコミュニケーション苦手と感じていた息子の変化を喜んで下さいました。

スタッフとして参加している地域住民等も含め子どもサロンが彼にとって身近な交流の場所となったとの事は大変ありがたく感じてます。

子どもサロンを開設して4年目に突入しましたが、つい先日、「夫が夜勤となり子どもが日中いる冬休みは静かにしなさいと言わなければならず、子どもたちも伸び伸び出来なくて、どうしたものかと思っています」との相談があり、子どもサロンを冬休み中開設する事になりました。

会場として地域公民館を使用しておりますが、自治会長さんも使用について快諾頂き、地域ともより良い関係性が保たれていると感じ、嬉しくなりました。

地域の宝、社会の宝である子どもたちを地域で育てる「地域が大家族」の指針にちょっぴり近づいたのを感じられ出来事でした。

野田ゆみ（住吉町子どもサロン）

●子ども食堂クリスマス会、子どもが１００人、赤ちゃん3人、大人70人、ボランティアを含めると１９０人ほどになった前回の12月の開催のこと。

ビンゴゲームは白熱し、子どもも大人も賞品をゲットしたく必死です。そんな中、ひとりの男の子がビンゴゲームのお手伝いを申し出てきた。そ

の子は皆が知る発達障害の子どもさんです。出た数字をカレンダーに書いてくれるお手伝いをしてくれました。

その子は算数が得意、数字が好き。普段は皆からもすこしうざったがられたり、面倒くさい？と思っているひともいるかもしれないけれど、賞品には興味がないわけではないけど、私たちスタッフが困ってる様子を察知したことで、さっと手伝いをしてくれて、最初、私も「ん？」と思ってしまったのでしたが、お手伝いはとても助かったのは間違いなく、１９０人もいる興奮してしまいそうな中、自主的にお手伝いしてくれたのでした。ボランティア行動の第一歩かなと思ってます。

あとからよく考えたらきちんとお礼も言わなかったナァと。後日きちんとお礼は言いました。ありがとう、助かったよ！　って。

普段は障害があることでお母さんも少しハラハラドキドキ、遠慮気味なんだけれど、お母さんにも自信を持って欲しいと思い、すぐにお母さんにはお礼のメールをしました。

地域で育てていく、みんな丸っとぐるっと支え合う関係、子ども食堂って良いなと我ながらいいことしてんじゃん！　なんて（笑）

まぁ、それでも謙虚に謙虚にいきたいと思っています。

穴井智子（熊本嘉島 だんだん食堂）

●初めての来場者で、帰り際に「学校の先生の紹介で来てみましたが、周りの皆がとても幸せそうで羨ましかったです。ここには僕の居場所がないなぁと思いしました。でも、進学も決まったので頑張ります」と言ってかえっていかれたこと。

山田徹（池田ことな食堂）

●私たちはコミュニティカフェを借りて月に一回寺子屋とこども食堂を開催してます。午前中、こどもたちが勉強している間、カフェのキッチンでボランティアがご飯を作り、お昼になったら皆で賑やかに「いただきます」。毎回楽しく、良い意味で緩く、よく「居心地が良い」って言ってもらってます。たまにお代わりし過ぎて「大丈夫？」っていう子がいるくらいで、登壇はもちろんパンフレット映えするような印象的で劇的なエピソードは無いです（笑）。

でもだからこそ、続けたいなと思ってます。楽しくて美味しいご飯が食べられるから行きたくなるところ、でも、スタッフの中には子供の権利を守る法律関係の仕事をしている人がいるのでアンテナは張ってます。運営の課題もてんこ盛りありますが、参加者にとってもスタッフにとっても居心地の良い場所を守っていけたらと思います。

大澤洋子（寺子屋＆誰でも食堂「てらこみーる」）

●親子で食べに来ていて、量が多すぎて食べきれない、または嫌いな食材があって食べられないのに、最後まで強制的に食べさせる親がいる場合の対応（どのように声をかけたらいいのか）に困ることがある。スタッフは、楽しく食事をしてほしい気持ちで運営しているが、子どもにとって食事が楽しくないものになるのではないかと心配している。

藤居阿紀子（えどがわあったか子ども食堂・かさいあったか子ども食堂・えどがわっこ食堂ネットワーク）

●毎回３００人が参加する子ども食堂です。定期的に料亭さんが会場で握り鮨をふるまってくださいます。その数１０００貫。

多世代が緩くつながることのできる場だからこそ、発達障害など発達課題をかかえる大人も「支援者」になることができることを実感しています。

金子淳子（みんにゃ食堂）

●食事が終わり子供たちが遊んでいる時に、不登校気味であった子が年上の子と口論になり「帰る！」と言って活動場所を飛び出しました。スタッフとすぐに追いかけ、口論になった理由などをききました。また、「喧嘩をしっかりやりなさい！自分の言いたいことをしっかり伝えなさい！」と本人にいいました。

その日から家でも「喧嘩をしていいんだよね！自分の思うことを言ってもよいのだよね！」と家族に言ったそうで、気持ちが楽になり、学校にいける日もできたそうです。

最近不登校の子供の参加が増えました。理由はいろいろありますが、ありのままの自分を受け止めてもらえないことも学校や友達との距離を広げているのかもしれません。

大村みさ子（子ども村：中高生ホットステーション）

●「こども」食堂ですが、あえてその波及効果について伝えたい。２つのこどもの食堂を運営しているがそれぞれ１つずつ。

１つ目は、１年生の男児と生後４、５ヶ月の赤ちゃんを連れてきてくれているお母さんがいる。１歳のお誕生日も丁度こども食堂日だったのでボランティアなどみんなでお祝いした。そのうちいろいろなことを話してくれるようになった。お父さんは来たことがないのできいてみると人と交わるのが嫌いなかただという。出産前のプレパパママ教室の帰りに「俺、人がたくさんいるああいうところ嫌いなの知ってるよね？」と切れられたとか…。そうか…毎回こども食堂に参加してくれている理由の一つがそういう家庭環境だったのか…と思い、こども食堂の果たせる役割、効果というものが子どもの成長に欠かせないものである場合もあるのだと再認識した。

もう１つは、高校卒業後自宅浪人をしている18歳の男性が毎回来てくれていた。地域の人や行政の機関の情報から、幼少期に親に虐待を受けていたと思われる男性だった。母は病死。父とは今も折り合いが悪く家で食事をしていない…。まだ物語は続くが、このような事情を抱えたボランティにとっても子どもを媒介にして地域のおばさんやおじさん、大人と温かなつながりができる場所になっていた。

やはり、子ども食堂はかけがえのない地域交流拠点になっていた！

若菜順（おびひろ子ども食堂・風の子めむろ）

●みなみすなこども食堂は2月で丸4年になります。開催当初は小学低学年だったこども達も中学生となり、求められることも変化してきています。こども達に成長と共にこども食堂も成長していけてるかなと感じます。

開催当初、とても人見知りが強く、自宅での夕食時間にこどもと向き合っているのがしんどいと食べにきていたこどもも年長さんとなり、今では母に似て元気いっぱいで最近はこども食堂よりも外でお友達家族と食べに行くことも増えたようです。

しばらく来なかった子ども達が少しして戻って来て来なかった間の様子を教えてくれたり、ずっと同じ場所で継続していることで見えてくるものもあります。

永井万美（みなみすなこども食堂／たつみこども食堂）

●子ども食堂開設は自宅を改装して今年4月、月2回夕食提供、子どもから高齢者まで、現在18回終了しました。12月25日にクリスマス会を開きました。狭い自宅に参加者44名、ボランティア14名総勢58名で嬉しい悲鳴でした。15時～マジックショー、クリスマスソング、バルーンアート、ビンゴゲーム・ケーキ付夕食など盛り沢山のメニューで、前々日から準備しました。おかげさまで大盛況でした。

子どもはもちろん、保護者も高齢者もボランティアの皆さんもお土産をもって笑顔で帰りました。心地よい疲れが残りました。

小池妙子（にっこりキッチン）

●自分が子ども食堂を始める前、スクール・ソーシャルワーカーをしていたときに支援していた子たち（当時小学生）が、成長し、ティーンエイジャーとなったときに、ボランティア・スタッフとして参加してくれるようになりました。年齢が近いこともあり、子どもたちには大人気。そして、食事の後の大量のお皿洗いも一手に引き受けてくれたり、終了後の「おとな食堂」で行なったおとな版クリスマス会では、おばさん、おじさんたちとプレゼント交換もしてくれて・・・地域の中での育ち合い、気持ちの交換を実感しました。いろいろな背景のいろいろな世代が集う場として継続していき、いま、子ども食堂に通ってくれている子どもたちの中にも、みんなで協力して課題解決したり、楽しく幸せになっていけると思える人が育ってくれるといいなと思っています。

厚谷まゆみ（福生こども食堂　あっちゃん家）

●夏に流し素麺をしたのですが、流し素麺だけで

なくナポリタン風素麺や焼きそば風素麺を臨機応変に作っていただき、たくさんの素麺をみなさんに食べていただきました。
その時の状況を見ながらメニューをアレンジしていただけて、大好評でした。

本山正江（赤松えがお食堂）

●こども食堂があって助かっている、楽しみにしている、と言われます。

清水紅（あつまれ前橋スポット）

●令和元年8月から二か月に1回の割合で『えがお食堂』として、赤ちゃんからシニアの方まで多世代型参加で始めましたが、2月で4回目ということで、未だに手探り状態で開催をしています。近隣の『子ども食堂』を参考にして、実践できるところは取り入れ、介護・健康相談や、昔遊びや高校の保育コースの生徒による手作りおもちゃでの遊び、就労支援事業所の野菜の販売など、同時進行で開催しています。参加者も次第に増えてきていますが、本来参加をしてほしい子どもや高齢者の方を、どのようにすれば足を運んでもらえるのか、ボランティアスタッフの募集など、課題は山積です。この活動が運営者が変わっても長く続いていけるように、無理な計画は立てず、参加者も運営側も楽しい時間を共有出来ていければと考えています。

福岡由美子（あかまつえがお食堂）

●子どもたちとSDGsについて学び、思いや願いを絵に描いて「にいはまSDGsアートフェスティバル」に参加した。こども食堂でもゴミ減量や3きり運動に取り組んでいる。

関口信子（あつまれ前橋スポット）

●小学生がこども食堂でボランティアをしてくれています。大人がお願いしなくても、募金やボランティアのお願いなど率先してやってくれています。その子曰く「山口が好き！」と言っています。
月一回のこども食堂ですが、「もう○回にきたよ！」と受付をしていると自慢気言って来る子どももいます。
無料で食堂をやっていますが、若いお母さんが「少しですが、使ってください」と野菜やお米を持って来られます。
マイ皿・マイコップを持参される方も増えています。持って来ている人を見て、「次回は持って

きます」と言われる方も多いです。

福田直子（NPO法人山口せわやきネットワーク）

●中学生の女子が「キッチンはいつまでやってる？」「うん？」「私が子ども産んだら一緒に来たいねん。こんな素敵な場所私の子どもにも味わってほしいから！」と。私は「そうか！　私は、動けなくなってるかもしれんけど、口は元気やと思うから、待ってるネ！」と伝えました。
彼女は、母に冷たくあしらわれているけど、自分の子どもを産んで育てることに夢を持っていると分かってとても胸が熱くなりました。
また別の日に、小学6年生の子どもたちは、「100円でこんなにいっぱい食べて大丈夫？」「食堂やっていけるの？」と質問が飛び交ってます。潰れたら嫌だと言う子どもたちでした。私は「大丈夫やで、皆が社会に出て税金収めてくれたら回り回って大丈夫やよ。」「それに私の老後も安泰になる」と伝えると、「・・・」と考えてた子どもたち。「税金学校で習った！　そうなんや！」「けど僕らが大人になったときって居てるか？」と私の年齢を気にしている様子でした。「皆で順番に支えて行くのが日本やから大丈夫」と答えた私です。
子ども食堂は、居場所として機能していくことが必要と感じた瞬間でした。

吹野加代（一般社団法人ポノポノプレイス　放課後カフェキッチンポノポノ、サンセットカフェ）

●今、子ども食堂にボランティアとして中学生、高校生にお手伝いしてもらってる中、お年寄りの方々も自分達にできる事があれば、言って欲しい、お手伝いしたいとの声もあり、多様な人が集まる中でみんなが元気になっていく波及している。
また、肩たたきボランティアもあり子どもと大人がふれあいがよい。
支援が必要な中学生がお手伝いが楽しいと、毎回来てくれるようになり、お母さんも喜んでいます。

松島陽子（ぐらんま食堂）

●こども食堂に管理栄養士をめざしている高校1年生の子が調理を手伝いたいと来てくれています。寡黙に包丁を使い、洗い物も嫌がらず、午後2時から8時まで調理を担当。私が作った深川ルンルン食堂のチラシを中学生のときに見て、高校生になったら手伝いに行こうと決めていたそうで、彼女のお父さんも「しっかり手伝ってこい」と背中を押してくれたそうです。こういうことがあると嬉しいですね。

荻隆宣（深川ルンルン食堂）

●生きた鶏10羽を宅配便で送るので調理して欲しいと言われた（丁重にお断りしました）

佐藤匡史（川口こども食堂）

●初期の頃、東村山こども食堂で実際にあったお話。
一対一のこども食堂からのスタート。古い蕎麦屋の空き店舗で2015年にスタート。ある女の子が毎日の様に通って来る。時にはシャッターを閉めていても。
その女の子があまりにも毎日来るのでなぜ、なのか聞いてみたら「だってココはおばあちゃんの家だもん」と言ったのだ。
よくよく、聞いてみたら本当に蕎麦屋が閉まるまでは、ココが彼女の居場所だった。家族のサポートは蕎麦屋のおばあちゃんによってされていた。
たった1人の発信からスタートしたこども食堂でした。現在はその店舗は老朽化により、クローズ。その後、一般社団法人食べものに感謝を立ち上げる。

小久保恵美（一般社団法人食べものに感謝♪）

●好き嫌いが多く肉も魚も食べられない子が、魚を食べられるようになり、年末にはステーキも食べました。当方はビュッフェ形式です。ボランティアが勧めたり、ほかの子が食べているのを見て、食べてみようと思ったのかもしれません。この4年で、鮭、さんま、鮎、鰺、鯖、そして牛肉が食べられるようになり、ママからも感謝されました。

金子よしえ（NPO法人ねりまこども食堂）

●ご飯しか食べなかったこどもがお魚やお肉を食べれるようになったり、美味しかったと声をかけてくれるようになったり、嬉しいことが増えてきた。

渡部美智子（NPO法人ねりまこども食堂）

●開設当初から一人で食べにきていた小学生の女の子がいました。大人ばかりのボランティアの輪が大学生、高校生と広がるにつれ、高校生や学生の言葉かけや交流で、女の子がボランティアとして手伝うように。格段に笑顔と会話が増えた姿に開設して良かったと心から思いました。

神野友美（ナポリ通りのこども食堂、かごしまこども食堂・地域食堂ネットワーク）

●こども達が日頃の生活状況について、スタッフにカミングアウトした時。
【内容】
家で放置されていて、テーブルには500円が毎夕置いてあり、それを握りしめてコンビニに食材を買いに行く。でも買ってくるのはお菓子とアイス。その子からすると、食べ物＝ご飯であった。みんなで調理して、本当のご飯を知った。

内藤陽一（ひがしっこ子ども食堂）

●初めて来たときは、知らない人の中で緊張して私から離れられなかった中学生が、高校入学してスタッフやボランティアさんに見せたいと制服姿を見せに来てくれたこと。毎回こども食堂に参加しながらだんだん柔らかい表情になっていったこ

とが印象深いです。
高齢者のボランティアも大学生のボランティアも子ども達と接することに喜びを感じているようで、こども食堂は、ボランティアにとっても居場所となっているようです。
イスラム教圏の国にルーツを持っている子ども達には食べられない食材があるので、調理スタッフが毎回工夫して調理していますが、「食べてくれるかな?」と緊張感をもって見守っています。
草場澄江（せんげん台こども食堂）

●食が細いお子さんのエピソード。調理にも参加してくれたその子は自分が作った「カボチャのバターハニーソテー」だけはパクパク食べてくれました。他の料理はいつも通りそんなに食べませんでしたが…、自分が作ったものって特別美味しく感じるのかもしれません。
鈴木晴菜（みどり町こどもひろば）

●桜新町こども食堂では、毎月、近所の認知症の施設（ノテ深沢）から、数名が、お手伝いと参加をしてくださいます。
1人の男の子がなぜか、時々参加するおじいちゃんを「とーさん、とーさん」と呼んで懐いてくれて、お膝に乗ったりして、おじいちゃんも、本当の孫の様に遊んでくれて、見ていてとても微笑ましいです。
すぎやまゆうこ（ゆめとぴあ　桜新町こども食堂）

●長く子ども食堂をやって、最近気づいた事があります。子どもは当たり前ですが、成長するという事です。現在までたくさんの子ども達が来て、常連さんたちが、昨年高校を卒業して、就職したり、大学に進学して、だんだん来なくなり、また新たに来る子どもが居るという事です。
そのうちの1人、中学の時は不登校、スクールソーシャルワーカーの協力で来るようになり、調理に参加したり、必ずこの日には来てくれるようになり、高校は絶対休まない！と宣言、案の定、1日も休まず、登校し、食堂にはバイトで稼いだお金の3分の1は食堂に子どもたちへ飲み物を買って来てくれるようになったり、ちいさいこどもや、中学生の面倒も見てくれるようになった。
福祉系の仕事をしたいと宣言し、見事合格、学校でも、実践例出して発表したり、卒論としても現在取り組んで居る。他にも、自閉症であった中学生はなかなか顔を上げない、話さない子どもでしたが、ある日から人と目を合わせて話す事ができるようになったこと。社会人でどうしても、うまく仕事場で話ができない、ここへ来ると話せる、だからここにはたまに来たくなるという人もいました。
また、ボランティア参加者の多くは中高年のキャリアウーマンの独身者、バタバタと忙しく食堂で働き、帰りにはスッキリとした顔で帰っていく姿がとても不思議です。
能登山明美（杉並子ども食堂ネットワーク、西荻寺子屋食堂）

●子どもが笑顔で「おかわり」と言って食べている姿を見てこの取り組みを生涯続けたいと思った。
伊勢仁志（椎名町子ども食堂）

●幼稚園や保育園でお友だちだった子どもたちが別々の小学校に入学したために、行き来が途絶えてしまっていたところ、子ども食堂で偶然にも再会して盛り上がってくれたのは、やっぱり冥利に尽きることでした。
大出治夫（より処たけのこ食堂）

●オーナーの90才のお誕生日の会の時。いつも2人分を黙々と食べている高校生の男子が、自分のスマホをサッと出して、花束を抱えたおばあちゃまを連写していたこと。
高倉千桂子（豊島子どもWAKUWAKUネットワーク、池袋食堂）

●初めて子ども食堂にきた母娘連れに帰りがけに声をかけたら、急に泣き出してしまってびっくりしました。DV夫から逃げてきていて、ここに来れば誰かに話せるかと思ったのだけど、幸せそうな人ばかりで来るべきところではなかったと思ってしまったとのこと。そんな悩みを抱えているとは全く見えなかったのだけれど、子ども食堂に来る人たちには、それぞれ背景があると再認識しました。
村上典子（要町あさやけ子ども食堂）

●急遽区内に転居された方のお子さんの保育園探しを手伝い、無事入園、保護者は仕事を辞めないで済んだ。
木内歩（要町あさやけ子ども食堂）

●若者サポートステーションの紹介でボランティアを始めたひきこもりだった30代の青年が、就労しながら子ども食堂のボランティアの活動を継続し、気づけばスタッフの信頼も暑く、子ども食堂がいつしか彼の居場所になっていたこと。
久住由紀子（にいがたふじみ子ども食堂）

●学習支援で来ていた生徒が卒業の時に「ここに来て人が信じられるようになりました」と言ってくれたのは私の宝物であり続けて行く力となっています。
高橋亮（こがねはら子ども食堂）

●色々な人との出会いがあり嬉しいです。
・ボランティアさんが定着しないことが悩みです。
片山早苗（子ども食堂　おむすび）

●ご両親がお仕事で忙しく、双子なので、色々と忙しく一緒にご飯を作ったりすることが出来ない。タヴェルナに行くようになり、ボランティアに参加しお手伝いや、地域の色々な方々と関われるようになった。
橋本千昌（タヴェルナ～小さな食堂～）

●その日は突然やってきた。こども食堂が避難所になった5日間。
令和元年9月に千葉市に上陸した台風15号は、千葉県に甚大な被害をもたらしました。TSUGAnoわこども食堂がある、ここ千葉市でも最長5日間の停電被害をうけました。
幸いTSUGAnoわは、停電の被害も台風による他の被害もなく済んだことから、台風が過ぎ去った直後の9月9日14時から、食堂を避難所として開放し、備蓄してあった食料や飲料を用いて炊き出しを行いました。
停電が解消し、地域の学校が完全に復旧するまでの5日間、TSUGAnoわこども食堂は避難所として子どもだけでなく、停電被害に遭われていた地域の方々の居場所となりました。行政による避難所の開設はTSUGAno わの3日後、9月12日のことでした。
何故、いち早く市民ボランティアの私たちが行動できたのか?
2017年からの活動の積み重ねの中で、地域に沢山の支援者の輪を広げていました。
TSUGAnoわこども食堂が地域の拠点となっていることは、2年余りの活動の中で感じていました。
私達がやるしかない！
これまで、地域の方々に支えてきて頂いた恩返しのつもりで避難所の運営を続けました。避難所開設中にも千葉県子ども食堂ネットワークの仲間たちや、各所から支援物資が続々と集まってきました。
千葉市若葉区の停電が解消した13日以降、避難所を解散してから、その支援物資の全てを、千葉県南房総市へと運び込み、15日にはママさんボランティアと共に、南房総市にて炊き出しボランティア（出張こども食堂）をしてきました。
一連の活動の様子を詳しく知りたい方は、是非、TSUGAnoわこども食堂のフェイスブックページを遡ってご覧頂きたいです。
そして、この機会をお借りし、千葉県を応援して下さった全国の皆様に感謝申し上げます。

参加者アンケートのお願い

みなさまのご意見、感想をぜひともお聞かせください。
ウェブのアンケートフォームを用意しました。
お名前やこども食堂名(所属団体名)は無記名でも結構です。
どうぞよろしくお願いいたします。

※PCで回答いただく方は、後ほどこども食堂ネットワークのメーリングリストでもURLを共有します

過去のこども食堂サミットの様子は、こども食堂ネットワークのウェブサイトで見られます。

こども食堂ネットワークのウェブサイト上部にある3つのタブのうち、「こども食堂を作りたい人」を選択してください。中段に「③こども食堂サミット アーカイブ」があり、ここ3年分のこども食堂サミットの映像(2018年、2019年の第1部のみ)とパンフレットが格納されています。ぜひご覧いただければうれしいです。

※画面は、こども食堂サミット2019で登壇した、豊島子どもWAKUWAKUネットワークの栗林知絵子さん。

こども食堂ネットワークについて

こども食堂ネットワークは、地域でこども食堂を運営している方たちが交流をし、こども食堂の輪を広げるための連絡会です。ウェブサイトで各こども食堂さんの情報を掲載したり、メーリングリストで情報や食材などを相互提供しています。参加費などはありません。ご参加を希望される方は、事務局までお問合せください。

こども食堂ネットワーク事務局

電話●03-5365-2296(平日10時〜18時)
メール●info@kodomoshokudou-network.com
ウェブサイト●http://kodomoshokudou-network.com/

「こども食堂サミット2020」は、朝日生命保険相互会社様による、2019年度「朝日の月醸金」により開催しています。

Memo